

蘇軾詩注解（三十四）

西岡淳
蔡毅
中裕史
中純子
原田直枝

（南山読蘇会）

中国宋代の詩人蘇軾の以下の作品について注解を施す。括弧内の数字は東北大学中国文学研究室作成『蘇東坡詩作品表』による通し番号。

壺中の九華の詩 並びに引（二〇二二）

江西一首（二〇二三）

秧馬の歌 並びに引（二〇二四）

鬱孤台（二〇二六）

塵外亭（二〇二八）

天竺寺 並びに引（二〇二九）

大庾嶺を過ぐ（二〇三〇）

建封寺に宿り、曉に尽善亭に登りて韶石を望む 三首（二〇三一～二〇三三）

月華寺（二〇三四）

二〇二二（施三五一一）

壺中九華詩 并引

壺中の九華の詩 并びに引

湖口人李正臣蓄異石九峯、玲瓏宛轉若窗櫺然、予欲以百金買之、與仇池石爲偶、方南遷、未暇也、名之曰壺中九華、且以詩紀之、

湖口の人 李正臣 異石の九峰なるを蓄う。玲瓏宛轉として窓櫺の若く然り。予 百金を以て之を
 買ひ、仇池石と偶を爲さんと欲す。南遷するに方りて、未だ暇あらざるなり。之を名づけて壺中の
 九華と曰う。且つ詩を以て之を紀す。

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。時に惠州（広東省）へ謫遷される途上、江州（江西省）に在った。

○壺中 壺中天のこと。後漢の費長房が市場役人をしていたとき、葉売りの老人が、商売がすむと店頭に掛けていた壺のなかにいつも飛び込んで姿を消した。費長房は老人に頼んでいっしょに壺に入れてもらうと、なかには別天地がひろがっていたという故事（『後漢書』費長房伝）による。○九華 池州（安徽省）の九華山。もと九子山という名であったのを李白が九華山と改めた。李白「九子山を改めて九華山と爲す聯句 并びに序」（『李太白全集』卷二五）の序に、「青陽県の南に九子山有り、山の高さ数千丈、上に九峰有りて蓮花の如し」とある。劉禹錫「九華山 并びに引」（『劉禹錫集箋註』卷二六）の引に、「九華山は池州の青陽県の西南に在り。九峰 秀を競い、神采 奇異なり」

とあり、詩に「九華山、九華山、自ら是れ造化の一尤物、焉んぞ能く人間に籍甚たらんや」（籍甚は、名声や評判が高いこと）とある。○湖口 江州（江西省）の県名。彭蠡湖のほとりに位置することになむ。○李正臣 字は端彦。文思院使（皇帝のために工芸品の裝飾などを担う役所の役人）となった。花竹禽鳥などの絵画に巧みであった（『宣和画譜』巻一九）。○異石九峰 晁補之「李正臣が怪石の詩の後に書す」（『鷄肋集』巻三三）に、「湖口の李正臣、世よ怪石を収めて数十百に至る。初め正臣 一石の高きこと五尺にして状異なること甚しきを蓄う。東坡先生 惠州に謫せられしとき、過りて之に題して壺中の九華と云う、其の一山に九峰あるを謂うなり」とある。○玲瓏 多くの複雑な孔穴のある美しい石のさま。双声の語。白居易「太湖に泛び事を書して微之に寄す」詩（『白居易集箋校』巻二四）に、「潤雪庄すること多く 松は偃蹇、巖泉滴ること久しく 石は玲瓏」とある。○宛転 くねくねと曲がるさま。ここでは、石の形状が変化に富むようす。疊韻の語。○窓櫺 れんじ。まどの格子。○仇池石 蘇軾が揚州知事であったときに、嶺南から還った知人から贈られた石。作品番号一九二六の詩（『蘇軾詩注解』二十五）を参照。○以詩紀之 詩に記して覚えとすること。このとき蘇軾は同行した息子の蘇過にも詩を作らせた。その詩は、「湖口の人 李正臣 異石の広袤尺余にして九峰玲瓏なるを蓄う。老人 之を名づけて壺中の九華と曰う。且つ詩を以て之を紀し、過に命じて継いで作らしむ」（『斜川集』巻一）である。

湖口の人である李正臣は、九つの峰のある珍しい石を所蔵している。それは多くの穴があいていて形は変化に富み、窓のれんじのようである。わたしは大枚をはたいて購入し、わが家の仇池石と一対にしたいと思っていたが、南へと謫遷されることになり、その暇もない。「壺中の九華」と名付けて、いま詩に記しておく。

- 1 清溪電轉失雲峯
清溪 電のごとく転じて 雲峰を失い
- 2 夢裏猶驚翠掃空
夢裏に猶お驚く 翠 空を掃うを
- 3 五嶺莫愁千嶂外
五嶺 千嶂の外を愁うる莫かれ

- 4 九華今在一壺中
九華きゅうか 今いま 一壺いっつこの中にあ在り
- 5 天池水落層層見
天池てんち 水落みすおちて 層層そうそうとして見え
- 6 玉女窗虛處處通
玉女ぎよめ 窓虚ましろつちろにして 処処ところどころ通ず
- 7 念我仇池太孤絕
我わが仇池きゆうちの太はなだ孤絶こぜつなるを念ねんじて
- 8 百金歸買碧玲瓏
百金ひやくきん 歸かえらんととき 碧玲瓏へきれいろうを買かわん

1〇清溪一句 一句は、続集では「我家岷蜀最高峰」に作る。電転は、稲妻のように早い動きをいう。杜甫「酔いて馬より墜つるを為す、諸公 酒を携えて相看」詩（『杜詩詳注』巻一八）に、「粉堞 電のごとく転ず 紫游の韁、東のかた平岡の天壁を出づるを得たり」（粉堞は、白壁ぬりの城の女牆。天壁は、崖壁の直立するさま）とある。雲峰は、雲のかかる山峰。謝靈運「從弟の惠連に酬ゆ」詩（『文選』巻二五）に、「瘵に寝ねて人徒を謝し、跡を滅して雲峰に入る」とある。2〇翠掃空 青い山が空を掃い清めんばかりに聳えること。李白「淮陰にて懷を書きて王宋城に寄す」詩（『李太白全集』巻二三）に「雲天 掃うて空碧、川岳 灑して余清」とある。蘇軾「秀州報本禪院の郷僧文長老の方丈」詩（『蘇東坡詩集』第二冊四四九頁）に「蜀叟に逢う毎に談じて日を終え、便ち覚ゆ 峨眉 翠空を掃うを」とある。3〇五嶺 江西省の南から湖南省の南を経て、広西チワン族自治区の北東まで連なる南嶺山脈の山々。あるいは、五嶺に至る峠の道をいう。杜甫「李十二白に寄す 二十韻」（『杜詩詳注』巻八）に「五嶺 炎蒸の地、三危 放逐の臣」（三危は、舜が三苗の種族を放逐した山の名）とある。〇千嶂 幾重にも連なるびようぶ状の山峰。劉長卿「横山の顧山人が草堂に過る」詩（『全唐詩』巻一四八）に「只だ見る 山の相掩うを、誰か言わん 路尚お通ずと、人は来たる 千嶂の外、犬は吠ゆ 百花の中」とある。4〇九華一句 九華・壺中については詩題の注を参照。一句は、大いなる九華山もこの奇石の中にそのまま収まっていることを思い、宇宙の小ささを感じたことをいう。5〇天池一句 天池は、天空にある大きな池。『莊子』逍遙遊篇に、「南冥とは、天池なり」とある。『太平御覽』巻四六に引く「九華山録」に、「山の上に池塘数畝・水田千石有り……其の水 流洩して龍池と為り、溢れ

て瀑泉と為りて龍潭に入る」とある。ここでは、上から水が流れるような石のようすを、九華山に見立てている。○層層 幾重にも重なるさま。劉禹錫「竹枝詞 并びに引」その九（『劉禹錫集箋証』卷二七）に、「山上層層たり 桃李の花、雲間の煙火 是れ人家なり」とある。6 ○玉女一句 玉女は、仙女。王延寿「魯の靈光殿の賦 并びに序」（『文選』卷一一）に「神仙 棟間に岳岳がくがくとして、玉女 窓を闚うかがいて下視かす」とある。「窓虚」は、続集では「窓明」に作る。7 ○仇池 仇池石のこと。詩題の注を参照。8 ○百金一句 建中靖国元年（一一〇二）、蘇軾は罪を許されて北へ帰る際、再びこの石を買おうと湖口に立ち寄ったが、すでに石は好事家に持ち去られていた。「予 昔、壺中の九華の詩を作る。其の後八年、復た湖口に過よぎれば、則ち石は已に好事者の取り去るところと為る。乃ち前韻に和して以て自ら解とくと云う」詩（『合注』卷四五）は、それを詠じたもの。晁補之「李正臣が怪石の詩の後に書す」（前掲）にもその事情が記される。玲瓏は、詩題の注を参照。「碧玲瓏」は、続集では「小玲瓏」に作る。

清らかな谷川は（私が乗る舟を浮かべて）雷いなまたの走るように流れ、雲のかかる廬山の峰々もすでに見えないが、夢のなかではなお翠の山々が空高く聳たえていることに驚く。これから赴く五嶺が千の山並みの向こうと嘆くこともあるまい、大きな山の連なる九華山でさえこの小宇宙に収まっているのだから。

（壺中の九華は）天空の高みにある池から水が次から次へと流れるようで、仙女の覗く窓があちこちであいていて、向こうが見通せる。ひとりぼっちの我が仇池石が不憫なので、（北へ）帰る際には大枚をはたいてこの目にもあやな碧の石を買いたいものだ。

二〇二三（施三五一一）

江西一首

江西一首

- 1 江西山水眞吾邦
江西の山水 眞に吾が邦
- 2 白沙翠竹石底江
白沙・翠竹 石底の江
- 3 舟行十里磨九漣
舟行十里 九漣を磨き
- 4 篙聲擘确相春撞
篙声擘确として相春撞す
- 5 醉卧欲醒聞淙淙
酔臥 醒めんと欲して淙淙を聞き
- 6 直欲一口吸老龐
直ちに一口に老龐に吸わしめんと欲す
- 7 何人得雋窺魚缸
何人か雋を得んと魚缸を窺い
- 8 舉叉絶叫尺鯉雙
叉を挙げて絶叫す 尺鯉双ふと

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。

○この詩は、すべての句が上平三の江の韻を踏む柏梁体である。江西は、いまの江西省南昌。蘇轍に「子瞻が江西に次韻す」詩（『欒城後集』卷二）がある。

1〇江西一句 白居易「代りて春に贈る」詩（『白居易集箋校』卷一六）に、「山は晴風を吐き 水は光を放つ、辛夷花白く 柳梢黄なり。但だ知る 江西の意を作す莫くんば、風景何曾ぞ帝郷に異ならん」とある。一句は、江西の自然が蘇軾の故郷蜀を想わせることをいう。2〇白沙一句 白沙・翠竹は、白い沙と緑の竹。杜甫が成都を詠じた「南隣」詩（『杜詩詳注』卷九）の「白沙・翠竹 江村の暮れ、相送れば柴門に月色新たなり」を踏まえる。石底江は、

水底の石がみえる清らかな川の流れをいう。柳宗元「小丘の西の小石潭に至る記」(『柳河東集』卷二九)に「竹を伐り道を取るや、下に小さき潭水見れ、水尤も清冽なり。全石以て底と為し、近岸は石底を巻きて以て出だす」とある。

3○舟行一句 瀧は、早瀬のこと。歐陽修「後漢桂陽の周府君の碑」(『集古録跋尾』卷三)に、「桂陽の真水・盧溪・曹溪の諸水、皆な武水と合流す。其の俗に、水の湍峻なるを謂いて瀧と為す」とある。一韓智翹の聞書に「江西ノ江ハ、瀬ガ多(キ)程ニ、十里ノ間ニ九里ハ滝デ有(ル)ゾ。滝ニ水ガスタクナウテ、船ガスリコクルゾ。サテ、磨ト云(フ)ゾ」(『四河入海』卷一の三)とある。4○篙声一句 篙声は、舟をこぐ竹竿の音。竿确は、石がごろごろと多いさま。疊韻の語。ここでは、篙が川底の石にあたる音として使われている。韓愈「山石」詩(『韓昌黎集』卷三)に、「山石竿确として行徑微なり、黄昏 寺に到つて蝙蝠飛ぶ」とある。春撞は、ぶつかるさま。韓愈「瀧吏」詩(『韓昌黎集』卷六)に、「南行 六句を逾え、始めて昌黎の瀧を下る、險惡 状うべからず、船と石 相春撞す」とある。

5○淙淙 さらにさらさらと水が流れる音。陶淵明「從弟敬遠を祭る文」(『陶淵明集』卷七)に、「淙淙たる懸溜、曖曖たる荒林」(懸溜は、滝のこと)とある。6○直欲一句 「直」は、施注と宋本のあるテキストでは「真」に作るが、合注にしたがう。龐は、唐の襄州居士龐蘊(字は道玄)のこと。江西に行つた龐蘊が、いかなる存在とも同じ次元にはいない者について馬祖に問うた際に、馬祖が「汝が一口に西江の水を吸い尽くすを待つて、即ち汝に向かつて道わん」と述べた故事(『景德伝燈録』卷八・襄州居士龐蘊の条)による。一韓智翹の聞書に、「老龐ハ、坡自(ラ)比(スル)ゾ。言(フ)ココロハ、此ノ水ノ淙々然トナルハ、我レヲ悟ラセウトテ、サラメクゲナト云(フ)心ゾ」とあるように、蘇軾は、自らを龐蘊になぞらえている。7○何人一句 得雋は、敵の猛将を捕らえること(『春秋左氏伝』莊公十一年)。後に大魚を捕獲する意味となる。韓愈「魚を又して張功曹を招く」詩(『韓昌黎集』卷九)に、「多きを競うて心転た細、雋を得て 語 時に囁し」とある。疍は、石を積んで作つた橋。飛び石。『爾雅』釈宮に、「石疍之を疍と謂う」とあり、郭璞の注に、「石を水中に聚めて以て歩渡術と為すなり」(術は、橋のこと)とある。魚疍は、魚を捕らえるため石を並べたもの。王注(趙次公)に、「石を聚めて水を渉るを疍と曰う。今 魚疍と言は、蓋し石を聚めて魚る処に抵つるなり」とある。8○又 やす。さすまた。魚などを刺し取る道具。○絶叫 大声で叫ぶこ

と。『世説新語』任誕篇に、「袁耽（えんたん）馬を投げて絶叫し、旁ら（かたわら）に人無きが若し」とある。○尺鯉雙 一尺（約三〇センチメートル）の大きさの二匹の鯉。「飲馬長城窟行」（『文選』卷二七）に、「客 遠方従り来たり、我に雙鯉魚を遺る。児を呼びて鯉魚を烹れば、中に尺素の書有り」とある。

江西の山水はまことに我が故郷さながらに、白い砂と緑の竹に（囲まれて）石の上を流れゆく川。船が十里すすむ間に九つもの早瀬にもまれ、船棹が岩を衝いてがくがくと音をたてる。

酔いから覚めかけてさらさらという川の流れが耳に入った。この老いた龐濫に江西の川をただちに一口で吸わせ（て悟らせ）ようというのだ。誰かが大物を獲ろうと魚よせの飛び石を窺い、やすを掲げて一尺の鯉が二匹だと大声で叫んでいる。

（担当 中 純子）

二〇二四（施注三五—三）

秧馬歌并引

秧馬おうばの歌うた 并ならびに引いん

過廬陵見宣德郎致仕曾君安止、出所作禾譜、文既溫雅、事亦詳實、惜其有所缺、不譜農器也、予昔遊武昌、見農夫皆騎秧馬、以榆棗爲腹欲其滑、以楸桐爲背欲其輕、腹如小舟昂其首尾、背如覆瓦以便兩髀、雀躍於泥中、繫束藁其首以縛秧、日行千畦、較之僮僕而作者、勞佚相絕矣、史記禹乘四載、泥行乘橇、解者曰、橇形如箕、適行泥上、豈秧馬之類乎、作秧馬歌一首、附於禾譜之末云、廬陵ろりょうに過りて宣德郎せんとくろう致仕曾君安止ちしそくあんしに見ゆるに、作る所の『禾譜』を出だす。文は既に溫雅にして、

事も亦た詳美なり。惜しむらくは其の缺くる所有りて、農器を譜せざるなり。予昔武昌に遊びしとき、農夫の皆な秧馬に騎るを見る。楡棗を以て腹と為して其の滑らかならんことを欲し、楸桐を以て背と為して其の軽やかならんことを欲す。腹は小舟の如く其の首尾を昂げ、背は覆瓦の如く以て両髀に便なり。泥中に雀躍し、束藁を其の首に繋けて以て秧を縛し、日に千畦を行く。之を僂僕して作す者に較ぶるに、勞佚相絶せり。『史記』に、禹四載に乗る、泥行には橇に乗ると。解する者曰く、橇の形は箕の如し、泥上に適行すと。豈に秧馬の類ならん乎。秧馬の歌一首を作りて『禾譜』の末に附すと云う。

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。

○秧馬 田植えのときに人が乗ってなえの植え付けをする農具。『三才圖會』器用十一卷ならびに『農政全書』卷二一収載の圖を参照。蘇軾は「秧馬の歌の後に題す 四首」その四（『蘇軾文集』卷六八）に、「吾れ嘗て湖北に在りしとき、農夫の秧馬を用いて泥中を行くを見る。極めて便なり。頃來、江西にて「秧馬の歌」を作りて以て人に教うるも、従う者有ること罕なり」と嘆じている。○廬陵 今の江西省吉安市。広東に向かつて贛江を遡る途中にある。○宣德郎 官名。散官二九階の第一九階で、正七品下の官位（『宋史』職官志）。○致仕 官を辞す。○曾君安止 字は移忠。『直齋書錄解題』卷一〇「禾譜五卷」の条に、「安止は熙寧の進士、嘗て彭澤の令為り」とある。○禾譜 『宋史』藝文志に、「曾安止「禾譜」五卷」とある。○武昌 蘇軾は、黃州に在った元豐三年（一〇八〇）から七年（一〇八四）の間に武昌（湖北省）をたびたび訪れている。○楡棗 ニレとナツメ。○楸桐 ヒサギとキリ。○覆瓦 瓦で覆うこと。○両髀 農夫の両方のもも。○雀躍 雀が踊るように両足を自在に動かすこと。『莊子』在宥篇に、「雲將、東に遊び、扶搖の枝を過ぎて、適たま鴻濛に遭う。鴻濛は方に將に脾を拊ち雀躍して遊ぶ」とある。○束藁 束ねた藁。○千畦 畦は、五十畝（二畝は宋代では五・六六アール）。○僂僕 かがむ。背中を丸める。○勞佚 苦勞と安樂。○禹乘四載 『史記』夏本紀に、「禹陸行には車に乗り、水行には船に乗り、泥行には橇に乗り、山行には楯に乗り」

とあり、蘇軾はこれを禹乘四載といっている。○解者 前掲『史記』の集解に引く孟康の注をいう。○附於『禾譜』之末 前掲『直齋書錄解題』に、「（東坡）禾譜を謂いて、「文は既に温雅にして事も亦た詳実なり。惜しむらくは其の農器を譜せざるなり」と。故に此の歌を以て之に附せり」とある。また「禾譜五卷」に続く「農器譜三卷統二卷」の条に、「耒陽の令 曾之謹撰。安止の姪孫なり。東坡の歌を作りし意を追述して此の篇を為す」とある。○この歌は上平声八齊の韻をもって毎句に押韻する。

廬陵まで来たときに、宣徳郎をもつて官を辞した曾安止君に会った。曾君は自らまとめた『禾譜』を取り出した。その文章は穏やかで品があり、事物も詳しく正確に述べられている。惜しいことに些か足りない点があった。農機具を採録していない。わたしは昔、武昌に遊んだおりに、農夫がみな秧馬に乗っているのを見たことがある。滑らかにするため楡や棗でその腹を作り、軽くするために楸や桐でその背を作っている。腹は小舟のように前部と後部があがっているし、背は瓦を葺いたようになって跨がりやすい。泥の中で自在に動くことができ、藁束をその首にかけてなえを縛っていて、一日に千畦を行くことができる。腰をかがめてする田植えと比べると、片や重労働、こちらは安楽でかけ離れている。『史記』の「禹乘四載」のくだりには「泥中を行くには橇に乗る」とあり、これに注して「橇の形は箕のようで、泥をかきわけて進む」という。これは秧馬の類ではないだろうか。秧馬の歌一首を作つて、『禾譜』の末尾に加えることとする。

- 1 春雲濛濛雨淒淒
春雲 濛濛 雨 淒淒
- 2 春秧欲老翠剡齊
春秧 老いんと欲して 翠剡は齊し
- 3 嗟我婦子行水泥
嗟 我が婦子 水泥を行く
- 4 朝分一壟暮千畦
朝に一壟を分かち 暮に千畦

- 23 不知自有木馱駝
22 笑我一生蹋牛犁
21 錦韉公子朝金閨
20 何曾蹶軼防顛躋
19 少壯騎汝逮老鰲
18 了無芻秣飢不啼
17 歸來挂壁從高棲
16 忽作的盧躍檀溪
15 山城欲閉聞鼓鼙
14 卻從畦東走畦西
13 何用繁縷與月題
12 織織束藁亦可齋
11 聳踊滑汰如鳧鷖
10 以我兩足爲四蹄
9 背如覆瓦去角圭
8 頭尻軒昂腹脇低
7 我有桐馬手自提
6 筋煩骨殆聲酸嘶
5 腰如筌篚首啄雞
- 腰は筌篚の如く 首は啄雞
筋煩わしく 骨殆うくして 声は酸嘶
我に桐馬有り 手自ら提ぐ
頭尻は軒昂して腹脇は低る
背は覆瓦の如く角圭を去る
我が兩足を以て四蹄と爲す
聳踊滑汰して鳧鷖の如く
織織たる束藁も亦た齋しむるべし
何ぞ繁縷と月題とを用いん
却つて畦東從り畦西に走る
山城 閉じんと欲して鼓鼙を聞く
忽ち的盧の檀溪に躍るを作す
歸り來たりて壁に掛けて高く棲むに從す
了に芻秣無きも飢えて啼かず
少壯より汝に騎りて老鰲に逮ぶ
何ぞ曾て蹶軼して顛躋を防がん
錦韉の公子 金閨に朝す
我が一生牛犁を踏むことを笑う
自ら木馱駝有るを知らず

1〇春雲一句 濛濛は、うすぐらいさま。『詩経』邠風「東山」に、「我れ来たるに東自りす、零雨 其れ濛たり」とある。凄凄は、ひややかなさま。『詩経』鄭風「風雨」に、「風雨 凄凄たり、鷄鳴 喈喈たり」とある。白居易「雨を賀す」詩（『白居易集箋校』卷二）には、「昼夜三日雨ふり、凄凄復た濛濛」とある。2〇翠剌 剌は、鋭いこと。また、切つ先。杜甫「行官張望 稻畦の水を補いて帰る」詩（『杜詩詳注』卷一九）に、「芊芊として 翠羽 炯たり、剌剌として 銀漢に生ず」とある。34〇嗟我・朝分二句 嗟は、嘆き悲しむ声。『詩経』邠風「七月」に、「嗟 我が婦子よ、日に改歳を為さんとす」とある。壠は、うね。畦は引の注を参照。白居易「足るを知るの吟 崔十八が未だ貧ならずの作に和す」（『白居易集箋校』卷二二）に、「一壠の田を種えず、倉中に余粟有り」とある。『四河入海』卷二四の四に引く瑞溪周鳳の「脛説」は、「此れ以下ノ二句ハ蓋シ尋常ナル農家ノ秧ヲ挿スノ勞ヲ言フナリ。或イハ一壠ヲ分カチ、或イハ千畦ヲ分カチテ、各オノ秧ヲ種エ使ムル乎」と解している。5〇腰如一句 筮篲は、ハープに似た楽器。啄鷄は、地面の餌を啄む鷄。6〇筋煩一句 煩は、つかれること。曹植「洛神の賦」（『文選』卷一九）に、「日は既に西に傾き、車は殆うく馬は煩る」とある。また左思「招隱詩 二首」その一（『文選』卷二二）に、「躊躇して足力煩れ、聊か吾が簪を投ぜんと欲す」とあり、その李善注に、「世務に勞しみ促られ、故に足力煩れて殆うし」とある。酸嘶は、苦しむうなること。杜甫「家無き別れ」詩（『杜詩詳注』卷七）に、「我れを生みて力を得ず、終身兩つながら酸嘶す」とある。7〇我有一句 以下は蘇軾が秧馬を用いる農民の立場を借りていう。桐馬は、秧馬のこと。8〇軒昂 高くあがるさま。韓愈「南山の詩」（『韓昌黎集』卷一）に、「崎嶇として軒昂たるに上れば、始めて觀覽の豊かなるを得たり」とある。9〇角圭 圭（たま）のものがつたかど。圭角に同じ。韓愈「石鼎聯句」（『韓昌黎集』卷二）に、「磨礪して圭角を去り、浸潤して光精を著す」とある。11〇聳踊一句 聳踊は、おどりがあがること。『隋書』音樂志下に、「又大鯨魚の霧を噴いて日を翳らしむる有り、倏忽として化して黃龍と成る。長さは七八丈、聳踊して出づ」とある。滑汰は、滑ること。滑るように進むこと。滑澁に同じ。皮日休「呉中にて雨に苦しむ。因りて一百韻を書して魯望に寄す」（『全唐詩』卷六〇九）に、「蓋檐は低く首を礙げ、薜地は足を滑澁せしむ」とある。鳧は、かも。鷺は、かもめ。『詩経』大雅「鳧鷖」に、「鳧鷖 涇に在り、公戸 来たり燕し来たり寧んず」などとう

たわれる。杜甫「漢陰行」(『杜詩詳注』卷三)に、「鳧鷖 散乱して 棹謳 発し、糸管 啾啾して 空翠 来たる」とある。12○織織一句 織織は、細いさま。杜甫「絶句漫興 九首」その八(『杜詩詳注』卷九)に、「舍西の柔桑 葉拈む可し、江畔の細麦 復た織織たり」とある。13○何用一句 繁纓は、馬の飾り。繁は、腹帯。纓は、むながい。『礼記』礼器に、「大路(天を祭る時に天子の乗る車)は繁纓一就(五色の糸で織りあげた飾り紐一すじ)」とある。月題は、馬の額につける飾り。『莊子』馬蹄篇に、「夫れ之に加すに衡扼(車の横木と頸木)を以てし、之を脊しくするに月題を以てす」とあり、陸徳明『經典釈文』に司馬彪と崔譔を引いて、「馬の額上の当額の月の如き形なる者なり」と解しているのに従う。14○却 宋本と施注および王注には、馬の額上を作るテキストもあるが、ここは合注に従う。15○鼓鞞 軍中で用いる太鼓。ここでは日暮れ時に打つ太鼓。一韓智羽の問書に、「言(フココロ)ハ、山城暮レント欲スル時分、暮鼓ヲ打(ツ)ゾ」とあるのに従う。杜甫「漢に泛かぶ」詩(『杜詩詳注』卷九)に、「濁醪 自ら初めて熟す、東城 鼓鞞多し」とある。16○忽作一句 的盧は、劉備の愛馬。劉表の追っ手に迫られて檀溪の水中に落ち込んだ時に、劉備が励ますと、的盧は一跳びに三丈も跳んで危機を脱したという(『三国志』蜀書・先主伝に引く裴松之注)。

17○归来一句 従は、まかす。杜甫「西閣を離れず 二首」その一(『杜詩詳注』卷一八)に、「学を失するは愚子に従せ、家無きは老身に任す」とある。高棲は、俗世間を逃れて静かに暮らすこと。ここでは(壁に掛けられて)高みに棲むこと。18○芻秣 馬の飼料。まぐさ。19○老鰲 鰲は、黄色を帯びた黒。やつれた顔色の形容。杜甫「王二十四侍御契に贈る 四十韻」(『杜詩詳注』卷一三)に、「会面 嗟 鰲黒なり、悽を含みて苦辛を話す」とある。20○何曾一句 蹶軼は、つまずくこと。軼は施注には、跌に作るテキストもある。顛躓は、落ちること。『尚書』微子に、「今 爾 予に顛躓を告ぐる指無し、之を若何せん」とあり、孔安国の伝に、「顛は隕つ、躓は墜つ」とある。宋本と施注および王注には、擠に作るテキストもあるが、ここは合注に従う。21○錦鞦一句 錦鞦は、鞍の下にあてる美しい敷物。岑參「衛節度が赤驃馬の歌」(『全唐詩』卷一九九)に、「紅纓 紫鞞(おもがい) 珊瑚の鞭、玉鞍 錦鞦 黄金の勒(くつわ)」とある。金閨は、漢代の金馬門の別称。学士の詰め所があった。江淹「別れの賦」(『文選』卷一六)に、「金閨の諸彦、蘭台の群英」とあり、李善注に「金閨は、金馬門なり」とある。22○牛犁 牛に引かせる

すき。23〇馱驥 駿馬。『漢書』匈奴伝上に、「奇畜」すなわちすぐれた家畜として「橐佗、驢、羸、馱驥、駒駘、驛奚」が列挙されていて、顔師古の注に、「馱驥は俊馬なり。生まれて七日にして其の母を超ゆ」とある。

春の雲がどんよりたちこめて雨がしとしと降りかかり、稲の苗が育つて緑の先端が揃ってきた。ああ憐れ、農民の女性や子どもが泥田を行く、広い田で朝方も夕方も区分けをして各おのが苗を植える。笠篋のように腰を曲げ、餌をついばむ鶏のように頭を突き出して、身体じゅうが疲れ果てて声もかすれるほど辛そうだ。

わたしには桐で作った手で提げることのできる馬がある、頭と尻が高く、腹部は低くなっている。背は瓦で覆ったように丸みがあり、自分の両足を四本の足として馬を動かす。水鳥が踊るように泥の中を進み、苗を縛っておくしなやかな藁たばも馬の飾りとなっていて、腹帯やむながい、額の飾り物などは無用のこと。

（この馬が）田の東から西へと動き回っているうちに、（日暮れ時になって）山城では城門を閉ざそうとして太鼓が聞こえてくる。名馬的盧が檀溪を躍り越えたようにして（田から跳び出して）、家に戻ると壁に掛けられて高い場所に棲まわせてもらう。まぐさなど無くとも飢えて啼くこともない。

若い頃から年老いるまでこいつに騎っていれば、つまり落馬しないよう用心したことなどない。飾り立てた馬に騎って参内する若様は、わたしを一生牛に犁を引かせて耕作しおると笑うが、木でできた駿馬を持っていることをご存じないのだ。

（担当 中 裕史）

二〇二六(施三五―五)

鬱孤臺*

鬱孤台

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|--------------------|-----------------|------------------|-----------------|----------------|-------------------|------------------------|--------------------|------------------|-----------------|----------------------|-------------------|------------------|---------------|
| 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 他年三宿處 | 高臺十日留 | 故國千峯外 | 草木半炎州 | 煙雲侵嶺路 | 灘聲入市樓 | 嵐氣昏城樹 | 鱗甲欲生洲 | 丹青未變葉 | 風酣章貢秋 | 日麗崆峒曉 | 水作玉虹流 | 山爲翠浪涌 | 鬱孤如舊游 | 八境見圖畫 |
| 他年
たねん | 高台
こうだい | 故国
ここく | 草木
そうもく | 煙雲
えんうん | 灘声
たんせい | 嵐氣
らんき | 鱗甲
りんこう | 丹青
たんせい | 風は
かぜ | 日は
ひ | 水は
みず | 山は
やま | 鬱孤
うつこ | 八境
はつぎやう |
| 三宿の処
さんしゆくゝところ | 十日留まる
じゆうじつとどまる | 千峰の外
せんほうのそと | 半ばは炎州
なかにんしゆう | 嶺路を侵し
れいろをおか | 市楼に入る
しろうにい | 城樹に昏く
じやうじゆくくら | 洲に生ぜんと欲す
しゆうにしょうとほつ | 未だ葉を変ぜず
いまだはへんを | 章・貢の秋
しょうこうあき | 崆峒の暁
くどうあかつき | 玉虹の流るるを作す
ぎまよくこうを | 翠浪の湧くを爲し
すいろうを | 旧游の如し
きゆうゆうごと | 図画を見る
ずがをみ |

16

準擬繫歸舟

準擬すじゆんぎ 歸舟きしゆうを繫つなぐんことを〔原注〕 以下四首皆虔州（以下いかの四首は、皆みな虔州けんしゆうなり）

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。

○鬱孤台 虔州（江西省）に在つて「虔州八境」と呼ばれた景勝の一つ。これより十七年前の元豊元年（一〇七八）、蘇軾は彭城に在つて、虔州の知事であつた孔宗翰こうそうかんから虔州八境の図を示され、図ごとに詩を題した。『蘇東坡詩集』第四冊に収められる作品番号〇八〇八〜〇八一五の詩「虔州八境の図 八首 並びに引」を参照。鬱孤台は、その七（作品番号〇八一四）に詠まれる。その注（『蘇東坡詩集』第四冊四四五頁）を参照。紹聖元年八月、蘇軾は惠州に向かう旅の途中で虔州を通り、はじめて親しく八境の風景を見た。このことを記した跋文が、「虔州八境の図 八首」とともに蘇軾の筆跡で石に刻まれ、拓本として伝わる（『蘇東坡詩集』第四冊四四八頁を参照）。原注に見えるように、本詩以降、作品番号二〇二七（小川環樹・山本和義選訳『蘇東坡詩選』（岩波文庫）に収める）、二〇二八、二〇二九までの四首は、虔州での詩である。

12 〇八境・鬱孤二句 旧游は、以前に遊んだこと。『四河入海』卷二の三に引く一韓智翹の聞書に「是ヨリ十七年サキ、先生 徐州（ノ）守為（リシ）時、孔周翰ガ八境図ヲ坡ガ方ヘヲコセテ此（ノ）図ニ詩ヲ題セヨト云（フ）程ニ、八首詩ヲ題シタガ、其（ノ）時、此（ノ）虔州ノ八境ヲ図デミテ、今直（カ）ニ惠州（ニ）赴（ク）ノ時、虔州ニ来テ其ノ境ヲ見レバ、此（ノ）台ナンドハ旧遊ノ如（ク）ナゾ」とある。3 〇山為一句 翠浪湧は、緑の樹木がかさなりあつて茂るさま。蘇軾「玲瓏山に登る」詩（『蘇東坡詩集』第三冊六七頁）に「翠浪 舞翻ぶはんす 紅こう 罷は亜あ、白雲 穿破くわす 碧へき 玲瓏」とある。その注を参照。また、詩題の注に引く「虔州八境の図 八首」その七に「煙雲縹渺たり 鬱孤台、積翠 空に浮かんで 雨半ば開く」とある。瑞溪周鳳の説に「此（レ）以下ノ八句、皆（ナ）上ノ句ハ山ヲ言（ヒ）、下ノ句ハ水ヲ言（フ）也」とある。4 〇水 川。一句では、山伝いの川をいう。〇玉虹 虹。ひいて、瀑布の急流を喩える。『初学記』卷二に引く晉・干宝『搜神記』に、孔子が、『春秋』『孝経』が成つたことを天に報

告すると、赤い虹が上から降り、黄色い玉に変わったという話が見える。李賀「北中寒」詩（『李賀歌詩編』巻四）「争澹たる海水 飛凌喧し、山瀑 声無く 玉虹懸かる」とある。5〇崆峒 崆峒山。虔州にある。『太平寰宇記』巻一〇八「虔州」贛県に「崆峒山は、古は仁空山と名づく、県の南六十里に在り。南康より蜿蜒として来たり、章貢二水 夾みて以て北に馳す、山麓は周廻幾百里、蓋し州の望なり」とある。6〇風酣 風が心地よいさま。『四河入海』は、酣を「シツカナリ」と訓じる。〇章貢秋 章貢は、章水と貢水。虔州はこの二つの川の合流点にある。詩題の注に引く「虔州八境の図 八首」その二の注（『蘇東坡詩集』第四冊四三八頁）を参照。7〇丹青一句 丹青は、樹木の葉や実の色の、紅と緑が入り交じるさま。杜甫「夔州の歌 十絶句」その四（『杜詩詳注』巻一五）に「楓林橘樹 丹青合し、複道重樓 錦繡懸かる」とある。未変葉は、葉がまだ黄落していないこと。『礼記』月令「季秋之月」すなわち陰曆九月には「草木黄落す」とあるが、陰曆八月のこの時、秋はまだ深まっていない。一韓智翊の聞書に「葉ノ黄落セヌ時分ゾ。マダ今ハゾ。サテ、水ニハ時分ゾ。秋ノ字ヨリ承ルゾ」とある。8〇鱗甲 うろこ。水の波紋が立つさまを喩える。白居易「秋日 張賓客・舒著作と共に龍門に遊び、醉中狂歌す 凡て二百三十八字」詩（『白居易易集箋校』巻二九）に「嵩峰の余霞 錦綺卷き、伊水の細浪 鱗甲生ず」とあり、また、蘇軾「前韻を用いて西掖の諸公が和せらるるに答う」詩（『合注』巻二七）に「春 宮柳に還りて 腰支活り、水 御溝に入りて 鱗甲動く」とある。9〇嵐氣 青々と湿りを帯びている山の空氣。謝靈運「晩に西射堂を出ず」詩（『文選』巻二二）に「曉霜 楓葉丹く、夕曛 嵐氣昏し」とあり、また、岑參「青城竜谿の奥道人に寄す」詩（『岑嘉州詩』巻一）に「絶頂 小蘭若、四時 嵐氣凝る」（蘭若は寺の意）とある。10〇灘声 急流の音。梁・元帝「巫山高」（『藝文類聚』巻四二）に「灘声下りて石に濺ぎ、猿鳴上りて風を逐う」とある。また、杜甫「韓十四の江東に省觀するを送る」詩（『杜詩詳注』巻一〇）に「黄牛 峽静かにして 灘声転じ、白馬江寒くして 樹影稀なり」とある。〇市樓 市中のりつばな酒樓。蘇軾「試官の考較を催して戯れに作る」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊三五二頁）を参照。11〇煙雲 うすいもやのかかったさま。3句の注に引く「虔州八境の図 八首」その七の句を参照。〇嶺路 峠みち。嶺は、山の峰。ここでは大庾嶺を指す。詩題の注に引く「虔州八境の図 八首」その三の注（『蘇東坡詩集』第四冊四三九頁）を参照。

12○炎州 炎熱の地。『楚辭』「遠遊」に「南州の炎徳を嘉し、桂樹の冬に榮くを麗しとす」とある。杜甫「広州の張判官叔卿の書を得たり、使つか、還るに、詩を以て意に代う」詩（『杜詩詳注』卷一〇）に「忽ち得たり 炎州の信、遙かに月峽従り伝う」とある。13○故国 一句 故国は、故郷。一句では、蜀を指す。惠州へ流謫の道を経て来て、その惠州にほど近い虔州の、八月に入つてなお緑深い南国の風景に、故郷蜀からの遠さを感じている。一韓智超の聞書に「南方へ謫セラルルトテ、ココマデ来てテ思フゾ。我（ガ）故郷ハ、遠キモノカナ。千峰ノ外ニアルゾ。思（ヒ）モ寄ラザル処ニ、十日留（マリ）テラルモノカナゾ」とある。14○高台 鬱孤台をいう。15○他年 一句 他年は、後年。三宿は、三泊すること。『後漢書』襄楷伝に「浮囷は桑の下に三宿せず。久しくして恩愛を生ずることを欲せざればなり」とあり、その注に、仏が、一つ所に長く逗留をしないことで、執着の心のないことを示した、という。「三宿」と14句の「十日」と、数字は合わないが、「三宿」が表す、ごく数日の宿泊に、鬱孤台での滞在「十日」を係けて、僧侶ならぬ蘇軾は、ここに愛着ができてしまった、と述べる。16○準擬 一句 準擬は、心づもりをすること。白居易「柳を種う 三詠」その二（『白居易集箋校』卷三三）に「準擬せん 三年後、青糸の緑波を払うを」とある。帰舟は、帰路に着く船。謝靈運「從弟惠連に酬う 五」（『文選』卷二五）に「夢寐にも帰舟を佇ちて、我が吝と勞とを積かん」とある。○〔原注〕 詩題の注を参照。

虔州八境は絵で見たことがあり、鬱孤台もはじめて訪れた気がしない。山は茂った樹木の緑の波が幾つも湧き起こり、川は玉でできた虹さながらの急流をなしている。

崆峒山の夜明けに日はうららか、章水と貢水の交わる一帯の秋に風が心地よい。樹木が織りなす（絵のような）紅くれなゐと緑の彩りは、まだ色あせないが、水際みぎわには魚のうろこのようなさざ波が立ちはじめている。

山から降りてきた霧が城内の樹木を晦まし、急流の音が街なかの酒楼にまで届く。薄いもやが大庾嶺の時みちをおおい、草木もなかなば炎熱の国のもの。

故郷は千の峰々のはるか向こう、この高い楼台に十日間逗留した。わずかのうちに愛着が湧いたこの場所に、

いずれ、北へ帰還する船を停泊させよう。

二〇二八（施三五七）

塵外亭

塵外亭

- | | | | | | | | | | | | |
|--|---|---|------------------------------------|--|--|---|---|---|--------------------------------------|---------------------------------------|---|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 豈墮山鬼計 | 馬駒獨何疑 | 龍虎爲斬薙 | 幽人宴坐處 | 俯視萬井麗 | 却立浮雲端 | 十步輒一憩 | 山高惜人力 | 揮手謝此世 | 散策塵外遊 | 贛水清可厲 | 楚山澹無姿 |
| あ
えん
き
けい
に
だ
だ
ず
る
や | ば
く
ひ
ど
り
な
ん
ど
う
た
が
ぎ
う | り
よ
う
こ
た
め
に
ざ
ん
ち
ず | ゆう
じん
えん
ざ
と
こ
ろ | ふ
み
み
ば
ん
せ
い
う
る
わ | ふう
ん
は
し
き
や
く
り
つ | じ
ゆ
つ
ほ
す
な
わ
ひ
と | や
ま
た
か
じ
ん
り
よ
く
を
お
し
み | て
ふ
る
て
こ
の
よ
を
し
や
し
や
す | さ
く
ざ
ん
じ
ん
が
い | かん
す
い
き
よ
わ
た
べ | そ
ざ
ん
た
ん
す
が
た
な |
| | 豈に山鬼の計に墮するや | 龍虎 爲に斬薙す | 幽人 宴坐の処 | 俯して視れば万井麗し | 浮雲の端に却立して | 十歩に輒ち一たび憩う | 山高くして人力を惜しみ | 手を揮いて此の世を謝す | 策を散じて塵外に遊び | 贛水 清くして厲る可し | 楚山 澹として姿無し |

(担当 原田直枝)

- 13 夜垣非助我
 14 謬敬欲其逝
 15 戲留一轉語
 16 千載起攘袂

夜垣やえん 我われを助たすくるに非あらず
 謬いつわつて敬けいするままにして其その逝ゆかんことを欲ほす
 戲たわむれに一いち転語てんごを留とどむれば
 千載せんざい 起たつて袂たもとを攘はらわん

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。

〇塵外亭 十七年前の元豊元年（一〇七八）、蘇軾は知虔州（虔州は、今の江西省贛州市）である孔宗翰に求められて、虔州（南康）の八つの名勝をえがいた「南康八境図」に、八首の詩を題している。これが「虔州八境の図 八首 並びに引」（『蘇東坡詩集』第四冊四三二頁）で、塵外亭はその第六首に詠じられる。その詩の注（同四四三頁）、および本注解に収める作品番号二〇二六の詩の注を参照。塵外亭は、虔州府の東五里にある馬祖巖という岩山の上にあつた。塵外は、浮世の外の意。

1 〇澹無姿 ほんやりして姿が見えない。澹は淡に同じく、淡いさま。ほんやりしたさま。杜甫「雨 二首」（『杜詩詳注』巻一五）その一に、「青山 澹として姿無し、白露 誰か能く数えん」とある。なお、姿の字を塵に作るテキストがある。2 〇贛水 川の名。江西省を流れて鄱陽湖に注ぐ。〇厲（着物を脱がずに）帯の上まで水につかつて川を渡る。『詩経』邶風「匏有苦葉」に、「深ければ則ち厲し、浅ければ則ち掲す」とあり、毛伝に「衣を以て水を渉るを厲と為す。帯由り以上なるを謂うなり」とある。3 〇散策 杖をついてあちこち歩く。策は、つえ。杜甫「鄭典設 施州より帰る」詩（『杜詩詳注』巻二〇）に、「北風 瘴癘を吹く、羸老 散策を思う」とある。〇塵外 塵外亭のことだが、この世の外の意味をかける。4 〇揮手 手を振る。別れのあいさつ。晉・劉琨「扶風歌」（『文選』巻二八）に、「手を揮いて長く相謝し、哽咽して言う能わず」とある。7 〇却立 少しあとずさりして立つこと。「清平鎮自り襟観・五郡・大秦・延生・仙遊に遊び……、大秦寺」詩（『蘇東坡詩集』第一冊五二九頁）にも、「足に信せて幽尋すること遠く、風に臨んで却立して驚く」とある。その詩の注も参照。8 〇万井 多くの家々。万戸。陳子昂「冬

衣を賜わるに謝する表」(『文苑英華』卷五九三)に、「三軍協せ慶び、万井相歡ぶ」とある。9○幽人 俗世を離れて静かに暮らす人の意。「劉道原の寄せらるるに和す」詩の注(『蘇東坡詩集』第二冊二四一頁)を参照。ここでは馬祖道一(七〇九―七八八。唐の憲宗から大寂禪師の号を賜った)をさす。塵外亭は、馬祖が修行したとされる岩山(馬祖巖)の上にあつた。詩題の注を参照。『方輿勝覽』卷二〇「贛州・馬祖巖」の条に、「贛県の東に在り。道一禪師錫を駐むるの地なり。……初め、馬祖嘗みに此の巖に棲まんと欲す。一夕、山鬼忽ちために垣を築く。馬祖之を見て曰く、「道を学んで至らず、邪崇の測る所と爲る。此れ吾が居する所に非ざるなり」と。因りて棄てて去り、龔公巖に営んで往きて居す」とある。修行が成つていれば、自己の心境を人に気付かれることがないというのは、馬祖禪の主要なテーマであつた(入矢義高編『馬祖の語録』一二七頁)。○宴坐 仏教で、心身を滅却して坐禅することをいう。『維摩經』弟子品(『大正藏』第一四卷)の冒頭に、「……道法を捨てずして凡夫の事を現わす、是をば宴坐と爲す。心 内に住まらずして亦た外に在らず、是をば宴坐と爲す……」などと詳しく説かれる。10○龍虎一句 龍虎は、龍と虎。山に住む神秘的な存在の荒々しさを喩える。斬雍は、草などを切りはらうこと。一句は、9句の注にあるように、山鬼が「垣を築」いてくれたことをいう。11○馬駒 一馬駒は、一頭の馬のことで、馬祖をさす。『景德伝燈録』卷五「南岳懷讓禪師」に、六祖慧能が懷讓に対して、「西天の般若多羅 識すらく、「汝が足下に一馬駒を出だし、天下の人を踏殺せん」と(般若多羅はインドの伝説的高僧)と語つたとある。12○山鬼 山にいる鬼神やもののけの類。9句の注を参照。13 14○夜垣・謬敬二句 夜垣は、9句の注を参照。一韓智翹は、「山鬼ガ、馬祖ノココニイラシムハ、ムツカシカラウズト思(ヒ)テ、イツハリ恭敬スルマネシテ、垣ヲ築キナンドシテマイラスル。其(レ)ヲ、馬祖ホドノ人ニテマシマスガ、是(レ)ヲ知ラズシテ捨(テ)テ去ラルルカ」(『四河入海』卷二の四)と記す。15○転語 迷いを転じて悟りを得させることば。この詩をさす。『碧巖録』第九六則に、「趙州(從諗) 衆に三転語を示す」とある。16○攘袂 たもとをまくって腕を突き出す。腕まくりをする。奮起するさま。『漢書』鄒陽伝に、「袂を攘つて正義する者は、独り大王耳」とある。一韓智翹は、「東坡ガ、カウ云(フ)テ、一転語ヲ留(メ)テライタガ、其(レ)ヲ後人ガ必(ズ)起ツテ、是ヂヤ非ヂヤト分別シテ云(フ)ベキゾ」と記す。

楚の山はもうぼんやりして姿が見えず、贛の川の清らかな流れは渡ることが出来る。杖をつけて（浮世の外という名の）塵外亭まで足をのばし、手を振ってこの俗世を去ることにしよう。高い山に登るのだから（籠かきたちは）力を保とうと、十歩進むごとに一休みする。雲を浮かべる高みから少しうしろに下がって立ち、見下ろせば無数の家々が連なりひろがる。

その昔、世俗を離れた馬祖が、心身を滅却して修行したというこの場所では、鬼神の使いが草をなぎはらつてくれたという。天下を圧倒する一馬駒いちばこともあろうものがそれで自身を疑うとは。何もみすみす鬼神の計略に陥ることなどなかったのだ。一夜のうちに垣根を立てたのはこちらに力を貸したのではなく、偽りの敬意を表して出て行かせようとしたまでのこと。

などと、戯れに悟りを導く言葉をこしらえて世に遺ぞしておけば、千年の後には、また腕まくりをして、ああだこうだと言いつ立てる者が出てくるだろう。

二〇二九（施三五七七）

天竺寺并引

天竺寺てんしゆくじ 并ならびに引い

予年十二、先君自虔州歸、爲予言、近城山中天竺寺、有樂天親書詩云、一山門作兩山門、兩寺元從一寺分、東澗水流西澗水、南山雲起北山雲、前臺發花後臺見、上界鐘清下界聞、遙想吾師行道處、天香桂子落紛紛、筆勢奇逸、墨跡如新、今四十七年矣、予來訪之、則詩已亡、有石刻存耳、感涕不已、而作是詩、

予年十二にして、先君虔州自り歸りて予が為に言えらく、城に近き山中の天竺寺に、樂天親ら書する詩有りて云う、一山の門は両山の門と作る、両寺は元一寺従り分かる、東澗の水は流る、西澗の水、南山の雲は起こす、北山の雲、前台に花は発いて後台より見え、上界に鐘は清くして下界に聞こゆ、遙かに想う、吾が師、行道の処、天香の桂子、落ちて紛紛たるを、と、筆勢奇逸、墨跡新たなるが如し、と。今四十七年たり。予来たつて之を訪えば、則ち詩は已に亡く、石刻の存する有るのみ。感涕已まず、而して是の詩を作る。

紹聖元年（一一〇九四）、五十九歳の作。

○天竺寺 虔州（江西省贛州市）の寺院。『方輿勝覽』卷二〇「虔州」の寺院の項に、「天竺寺、（贛）水の東三里に在り。白居易の韜光禪師に贈りし墨跡旧と存す。眉山の老蘇嘗て寺に至りて焉を觀る。後四十七年、東坡南遷せられて再び訪うも、惟だ石刻を見るのみ」とある。韜光は、唐の禪僧で蜀の人。『景德傳燈錄』（卷四）杭州烏窠道林禪師の条に、杭州の靈隱寺の僧としてその名がみえる。また『全唐詩』卷八二三に、「白居易の招かるるに謝す」詩を収める。○先君 亡父。蘇軾の父、蘇洵（一〇〇九—一〇六六）のこと。蘇洵は慶曆六年（一一〇四六）に科擧受験に失敗し、翌年の慶曆七年（一一〇四七）には都を離れて虔州に至り、天竺寺に遊んだ。蘇軾が十二歳であったのはこの年で、五月には祖父の蘇序が没したため、蘇洵はその年のうちに蜀に帰っている。○樂天親書詩 「韜光禪師に寄す」（『白居易集箋校』外集卷上）として伝わるが、この詩は元來、蘇軾「樂天の詩を書す」（『蘇軾文集』卷六七）を出処とする、いわゆる佚詩である。蘇軾はその文章で白居易の詩を掲げた後、「唐の韜光禪師 錢塘の天竺自り来たつて此の山に住す。樂天 蘇に守たる日、此の詩を以て之に寄す。慶曆中、先君此の山に遊び、猶お樂天の真蹟を見る。後四十七年、軾 南遷せられて虔に過り、復た此の寺を経るも、徒だ石刻を見る而已。紹聖元年八月十七日」と記す（天竺は、杭州の天竺寺のこと）。○一山・両寺二句 『咸淳臨安志』卷八〇「寺院・景德靈隱寺」に、「靈隱・天竺の両山は一門由りして入る」とある。靈隱と天竺は、杭州の山および寺の名。靈隱山（靈隱寺）は、「靈隱寺に遊んで、

来詩を得、復た前韻を用う」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二二二頁）を参照。天竺山（天竺寺）は、「雨中、天竺の靈感觀音院に遊ぶ」詩の注（『蘇東坡詩集』第二冊二五三頁）を参照。○東澗一句『咸淳臨安志』卷二三「山川・合澗橋」に、「靈山の陰・北澗の陽は即ち靈隱寺、靈山の南・南澗の陽は即ち天竺寺なり。二澗の流水をば錢源泉と号す。寺峰の南北を繞りて下り、峰前に至りて合して一澗と為る。橋有り、号して合澗橋と為す」とある。○上界 天上世界。神仙や仏が住まうとされた。張九齡「紫蓋山に禪り、玉川山寺に過る」詩（『全唐詩』卷四九）に、「上界に仏影を投じ、中天に梵音を揚ぐ」とある。○下界 人の世。上界に対していう。白居易「曲江にて酔いし後、諸親故に贈る」詩（『白居易集箋校』卷一五）に、「中天 或いは長生の葉有らんも、下界 応に不死の人無かるべし」とある。○天香 天上のかおり。○桂子 モクセイの花。宋之問「靈隱寺」詩（『全唐詩』卷五三）に、「桂子 月中より落ち、天香 雲外に飄る」とある。○四十七年 蘇洵が虔州の天竺寺に遊んだのは慶曆七年（一〇四七）で、この詩が作られた紹聖元年（一〇九四）から四十七年前にあたる。

私が十二歳のとき、亡き父上が虔州から帰郷して私にこうおっしゃった。「（虔州の）城市に近い山中にある天竺寺に、白樂天がみずから書きしるしたこんな詩があった。「一つの山門が二つの山の門になっており、二つの寺はもとも一つの寺から分かれたものだ。それは東の谷川の流れば西の谷川の流れと一緒になり、南の山にかかる雲がやがては北の山の雲を起こすようなもの。前の高台に花が咲けば、後ろの高台からそれが望まれ、天上世界で鐘をつけば、その清らかな音色がすぐ下界にも聞こえる（ように関係が深い）。我が師が仏の道を修めているところでは、きつとモクセイの花が天上の香を漂わせながら散り落ちていることだらう」。その筆勢は並はずれてすばらしく、墨跡は淋漓としていま書き上げたばかりのようだった」と。あれから四十七年が経った。いま私がこうして寺を訪うてみると、もはや白樂天が詩を記したその書跡はなく、石刻がのこっているだけだった。感涙やまずしてこの詩を作った。

- | | | |
|---|---------|------------------|
| 1 | 香山居士留遺跡 | 香山居士 遺跡を留む |
| 2 | 天竺禪師有故家 | 天竺禪師 故家有り |
| 3 | 空詠連珠吟疊壁 | 空しく連珠を詠じて 疊壁を吟じ |
| 4 | 已亡飛鳥失驚蛇 | 已に飛鳥を亡いて 驚蛇を失す |
| 5 | 林深野桂寒無子 | 林深くして 野桂 寒くして子無し |
| 6 | 雨浥山薑病有花 | 雨浥して 山薑 病んで花有り |
| 7 | 四十七年眞一夢 | 四十七年 眞に一夢 |
| 8 | 天涯流落淚橫斜 | 天涯に流落して 涙 横斜 |

1〇香山居士 白居易のこと。『旧唐書』白居易伝に、「香山の僧如満と香火社を結び、毎に肩輿にて往来し、白衣鳩杖して、自ら香山居士と号す」とある。2〇天竺禪師 韜光禪師のこと。詩題の注を参照。3〇連珠 玉を連ねる。転じて、美しい詩文、およびそれを作ることをいう。聯珠に同じ。唐・宣宗「白居易を弔す」(『全唐詩』卷四)に、「玉を綴り珠を聯ねて六十年、誰か冥路に詩仙と作らしめし」とある。李厚は、詩題に引く白居易の「韜光禪師に寄す」詩は、聯珠体(比喩や象徴の句を連ねる詩体)であるとす。〇疊壁 壁玉を重ねる。ここでは連珠に同じく、美しい詩文およびそれを作ることをいう。『尚書』顧命に、「昔の君の文王・武王は、重光を宣き、……」とあり、『經典釈文』は馬融を引いて、「日月は壁を疊ぬるが如く、五星は珠を連ぬるが如し」という。4〇已亡一句 飛鳥は、書の筆勢が鳥が飛びたつように勢いがあること。驚蛇は、蛇が草むらに逃げ込むように、筆勢にすばやさがあること。『宣和書譜』(卷一九)釈垂棲の条に、「世 徒だ張の顛なるを知るのみにして、実は顛に非ざるを知らず。其の自ら「吾が書は大ならず小ならず、其の中道を得ること、飛鳥の林より出で、驚蛇の草に入るが若し」と謂うを觀るに至りては、則ち果たして顛ならんや」とある。一句は、失われた白居易の筆跡についていう。5〇桂子 モクセイの花。詩

題の注を参照。6○山薑 ヒョウの異名。和名オケラ〔国訳本草綱目〕卷二二。キク科の多年草で、薬用に用いる。秋に白色あるいは紅紫色のアザミに似た花を咲かせる。この二句について一韓智翊は、「昔、先君ノ見シヨリハ、定（メ）テ荒靡スベキゾ」〔四河入海〕卷二の四」と記す。7○四十七年 詩題の注を参照。8○天涯一句 天涯は、空の果て。極めて遠いところをいう。流落は、流浪し落ちぶれる。淪落に同じ。白居易「琵琶行」〔白居易集箋校〕卷二二に、「同に是れ天涯淪落の人、相逢うは何ぞ必ずしも皆て相識らんや」とある。

香山居士白乐天はこの地に筆跡を留め、天竺禪師韜光はかつてこの地に住まった。居士はひたすら玉壁を連ねたかのような詩を詠じ続けたが、鳥が飛び立ち蛇がすばやく逃げるかのようなその筆跡はすでにない。

寒い時節として林の奥のモクセイの木には花もなく、雨にぬれるオケラが病んだようすで花を咲かせている。あれからの四十七年の歲月はまこと一場の夢のよう。世界の涯へとさすらうこの身を思えば涙がこぼれ落ちる。

(担当 西岡 淳)

二〇三〇(施三五一九)

過大庾嶺

大庾嶺を過ぐ

- | | | |
|---|-------|--|
| 1 | 一念失垢汗 | 一念 <small>いちねん</small> 垢汗 <small>こうお</small> を失えは |
| 2 | 心身洞清淨 | 心身 <small>しんしん</small> 洞 <small>どう</small> にして清淨 <small>しじやうじやう</small> |
| 3 | 浩然天地間 | 浩然 <small>こうぜん</small> たる天地 <small>てんち</small> の間 <small>かん</small> |
| 4 | 惟我獨也正 | 惟 <small>た</small> だ我 <small>わ</small> れのみ独 <small>ひと</small> り正 <small>ただ</small> し |

- 5 今日嶺上行
今日 嶺上に行けば
- 6 身世永相忘
身世 永く相忘る
- 7 仙人拊我頂
仙人 我が頂を拊で
- 8 結髮受長生
髮を結いて長生を受く

紹聖元年（一一〇九四）、五十九歳の作。

○大庾嶺 『元和郡県志』卷三五「韶州」に、「大庾嶺、一に東嶠山と名づく、即ち漢の塞上なり。（曲江）県の東北一百七十二里に在り」とある。今の江西省と広東省の隣接するところであり、いわゆる五嶺では最も東に位置する。蘇軾はのちに海南島から北へ帰還する際、「余昔嶺を過ぎて南し、詩を龍泉の鐘上に題す。今復た過ぎて北し、前韻に次す」と題する、この詩に次韻する詩を作った。

- 1 ○一念 さわめて短い時間。『仁王般若波羅蜜經』觀空品（『大正藏』第八卷）に、「九十刹那を一念と為す」とある。
- 2 ○洞 からりと開いているさま。『黃帝内經素問』卷一「四氣調神大論」に、「夏氣に逆らえば、則ち太陽長ぜず、心氣内に洞なり」とあり、注に「洞は、中の空なるを謂うなり」とある。
- 3 ○浩然一句 浩然の気は、天地の間に満ちる大きく強い気。『孟子』公孫丑上篇に、「曰く、「我れ吾が浩然の氣を養う」と。「敢えて問う、何をか浩然の氣と謂う」と。曰く、「言ひ難きなり。其の氣たるや、至大至剛、直を以て養うて害すること無ければ、則ち天地の間に塞がる」とある。
- 4 ○惟我一句 『莊子』徳充符篇に、「命を地に受くるは、惟だ松柏のみ独り在りて、冬夏に青青たり。命を天に受くるは、惟だ舜のみ独り正しくして、幸いに能く正生にして以て衆生を正す」とある。
- 6 ○身世一句 身世は、この身とこの世のこと。鮑照「詠史詩」（『文選』卷二二）に、「君平 独り寂寞たり、身世兩つながら相棄つ」とあり、また白居易「渭村に退居し、礼部の崔侍郎、翰林の錢舍人に寄する詩 一百韻」（『白居易集箋校』卷一五）に、「憐れむ可し 身と世と、此より兩つながら相忘れん」とある。
- 7 8 ○仙人・結髮二句 拊は、

撫に同じく、なでること。受の字を授に作るテキストもあるが、宋本施注に従う。李白「乱離を経たる後、天恩夜郎に流さる。旧遊を憶いて懐いを書し、江夏韋太守良宰に贈る」詩（『李太白全集』巻二）に、「仙人我が頂を撫で、髪を結いて長生を受く」と、全く同じ二句がある。蘇軾は、謫仙人としての李白の詩句を借りて、嶺外に流謫される自らの「登仙」を詠じたのであろう。

汚れた雑念をさつとなくして、心身ともにすっきりきれいになった。浩然の気が満ちる天地の間に、わたし一人だけが正々堂々と立っている。

今日この大庾嶺までやってきて、わが身も世のことも完全に忘れ去ってしまう。（李白と同じように）仙人はわたしの頭を撫で、髪を結いあげて長生を授けてくれた。

二〇三二～二〇三三（施三五―一〇～一二）

宿建封寺曉登盡善亭望韶石三首

建封寺に宿り、曉に尽善亭に登りて韶石を望む 三首

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳の作。

○建封寺 韶州（広東省）の寺の名。『方輿勝覽』巻三五「韶州」に、「尽善亭、建封寺に在り」とある。○尽善亭 『大明一統志』巻七九「韶州府」に、「尽善亭、府城の東一百里に在り、宋の蘇軾嘗て此に登り、韶石を望みて詩を賦す」とある。○韶石 『太平寰宇記』巻二五九「韶州・曲江県」の条に引く「郡国志」によれば、韶石は、大きさがほぼ同じ二つの石で、一里の距離をへだてて双闕のように対峙している。昔、舜がこの石に登って韶樂を奏させたため、韶石と名付けたという。

二〇三二（施三五―一〇）

その一

- 1 雙闕浮光照短亭
雙闕 光を浮かべて短亭を照らす
- 2 至今猿鳥嘯青燐
今に至るまで 猿鳥 青燐に嘯く
- 3 君王自此西巡狩
君王 此れ自り西のかた巡狩せば
- 4 再使魚龍舞洞庭
再び魚龍をして洞庭に舞わしめん

1〇双闕一句 闕は、宮殿や祠廟などの門の上に並ぶ楼。『蘇軾詩注解（十二）』に収める作品番号一七八三の詩の注を参照。『元和郡県志』卷三五「韶州・曲江県」に、「韶石は、県の東北八十里に在り。両石相對し、相去ること一里。石の高きこと七十五丈、周廻五里、双闕に似たる有り、韶石と名づく」とある。○浮光 水面に映る光。陳・陰鏗「青草湖を渡る」詩（『藝文類聚』卷九）に、「天に帯びて迴碧を澄み、日に映じて浮光を動かす」とある。ここでは韶石に浮かぶ光をいう。○短亭 亭は、はたこや。古くは長亭と短亭があり、五里ごとに短亭、十里ごとに長亭を置いた。庾信「哀江南の賦」（『庾子山集』卷一）に、「十里五里、長亭短亭」とある。ここでは尽善亭を指す。2〇至今一句 青燐は、青く光るさま。揚雄「羽獵の賦」（『文選』卷八）に、「玉石齷齪として、眩耀青燐たり」とあり、李善の注に「青燐は、光明の貌」とある。また、張九齡「巫山高」（『全唐詩』卷四七）に、「巫山 天と近し、煙景 長に青燐たり」とある。34〇君王・再使二句 君王は、舜のこと。巡狩は、天子が諸侯の国を巡って視察すること。『孟子』梁惠王下篇に、「天子の諸侯に適くを巡狩と曰う。巡狩とは、守る所を巡るなり」とある。また『莊子』至樂篇に、「咸池九韶の楽、之を洞庭の野に張れば、鳥は之を聞いて飛び、獸は之を聞いて走り、魚は之を聞いて下り入り、人卒は之を聞き、相与に還（環）りて之を觀る」とある。

宮門上に並ぶ楼のような韶石に浮かんだ光が尽善亭を照らす。山の（青い光の）中で今では猿や鳥が鳴いて

いる。舜がここよりさらに西へと巡狩すれば、広大な洞庭の野の魚龍も韶樂に合わせて踊ることだろう。

二〇三二（施三五—一）

その二

1 蜀人文賦楚人辭

蜀人の文賦 楚人の辭

2 堯在崇山舜九疑

堯は崇山に在り 舜は九疑

3 聖主若非眞得道

聖主 若し眞に道を得るに非ざれば

4 南來萬里亦何爲

南來万里 亦た何か爲ん

12〇蜀人・堯在二句 ○蜀人は、司馬相如のこと。『史記』司馬相如伝に引く「大人の賦」に、「唐堯に崇山に歴り、虞舜に九疑に過る」とあり、注（正義）に、「崇山は、狄山なり。『海外経』に云う、「狄山、帝堯をば其の陽に葬る」と。九疑山は、零陵の營道県にあり、舜をば葬り処く所なり」とある。楚人は、屈原のこと。『楚辭』「離騷」に、「百神竊いて其れ備に降り、九疑續として其れ並び迎う」とあり、王逸が「九疑は、舜をば葬る所なり」と注している。『尚書』舜典に、「（舜）驩兜を崇山に放つ」とあり、孔穎達の疏に、「禹貢に崇山無し、其の処を知らず、蓋し衡嶺の南に在るなり」とある。九疑は、山の名。蒼梧山ともいい、今の湖南省寧遠県の南にある。『史記』五帝本紀に、「（舜）南のかた巡狩し、蒼梧の野に崩す。江南の九疑に葬る」とある。

蜀人司馬相如の賦と楚人屈原の辭によるならば、堯は今も崇山に在り、舜は九疑山に在るのだ。聖天子たちがもし確かに不死の道を会得したのでなければ、どうして万里の彼方にある南方の山に來られたらうか。

二〇三三（施三五—一二）

その三

- 1 嶺海東南月窟西
嶺海れいかいの東南とうなん 月窟げつくつの西にし
- 2 功成天已錫玄圭
功成こうなりて 天てん 已すでに玄圭げんけいを錫たまう
- 3 此方定是神仙宅
此この方なた 定きためて是これ神仙しんせんの宅たく
- 4 禹亦東來隱會稽
禹うも亦また東來とうらい 會稽かいけいに隠かくる

1〇嶺海 嶺南の地。海に近いのでかく呼ぶ。嶺南は唐代の道の一つ。五嶺（湖南省の衡山から東方の海に至るまでの山系で、五つの峰がある）の南、広東・広西・安南の地（『旧唐書』地理志）。〇月窟 月の沈み宿るところ。はるか西方の地をいう。揚雄「長楊の賦」（『文選』卷九）に、「西のかた月窟を厭え、東のかた日域を震わす」とあり、李善は服虔を引いて、「窟の音は窟、月の生ずる所なり」（窟の漢音はコツ）という。意味上も窟は窟に通じ、五臣註本は、「月窟」を「月窟」に作る。2〇功成一句 錫は、賜に同じ。玄圭は、黒色の玉器で、殊勲があつた人に与える。『尚書』禹貢に、「東は海に漸み、西は流沙に被び、朔と南は声教の暨ぶまでにて、四海に訖る。禹 玄圭を錫わり、厥の成功を告ぐ」とある。3〇神仙宅 神仙の住まい。孫綽「天台山に遊ぶの賦」（『文選』卷一一）に、「皆な玄聖の遊化する所、靈仙の窟宅する所なり」とある。4〇禹亦一句 『史記』夏本紀に、「十年、帝禹 東のかた巡狩し、會稽に至りて崩ず」とあり、『太平御覽』卷八二に引く皇甫謐『帝王世紀』に、「（禹）年百歳にして、會稽に崩ず。因りて會稽山陰の南に葬る。今 山上に禹の冢有り」とある。

東南は嶺海から、西は月の隠れるところまで、蓋世の功勞によつて天からすでに玄圭を賜わつた。この辺りはきつと神仙の住まいなのだ。だから禹も東のかた會稽に隠れ棲んだのだ。

（担当 蔡 毅）

二〇三四（施三五—一三）

月華寺*
月華寺

- 1 天公胡爲不自憐
2 結土融石爲銅山
3 萬人採斲富媪泣
4 祇有金帛資豪姦
5 脫身獻佛意可料
6 一瓦坐待千金還
7 月華三火豈天意
8 至今茭舍依榛菅
9 僧言此地本龍象
10 興廢反掌曾何艱
11 高巖夜吐金碧氣
12 曉得異石青爛斑
13 坑流窟發錢涌地
14 暮施百鎰朝千鎰
15 此山出寶以自賊

天公 胡爲れぞ自ら憐れまずして
土を結び石を融かして銅山と爲す
万人 採り斲つて富媪泣き
祇だ金帛の豪姦を資くる有るのみ
身を脱して仏に獻ず 意 料る可し
一瓦 坐ながらにして千金の還るを待つ
月華の三火は豈に天意なるか
今に至るまで 茭舎 榛菅に依る
僧は言う 此の地 本と龍象
興廢 掌を反す 曾ち何ぞ艱ならんや
高巖 夜に吐く 金碧の氣
曉に得たり 異石の青くして爛斑たるを
坑より流れ窟より発して 錢 地に湧く
暮に百鎰を施して朝に千鎰
此の山 宝を出だして以て自ら賊う

16 地脈已斷天應慳
地脈 ちみやく 已に断たるは すで 天 てん 応に慳しむべし

17 我願銅山化南敵
我れ願わくは われ 銅山の南敵と化して

18 爛漫黍麥蘇惛鰥
爛漫たる黍麥 らんまん 惛鰥を蘇せん

19 道人修道要底物
道人 どうじん 道を修めて底物をか要せん

20 破鑿煮飯茅三間
破鑿 はさう 飯を煮て めし 茅 ぼう 三間 さんけん

〔原注〕 寺鄰零水場、施者皆坑戸也。百年間、蓋三焚矣（寺は零水場に隣す、施す者は皆な坑戸なり。百年間、蓋し三たび焚けり）

紹聖元年（一〇九四）、五十九歳のとき、惠州（広東省）に流される途中、韶州（広東省）での作。

○月華寺 韶州の寺院。『（広東省）韶州府志』卷二六「古跡・寺觀」の条に、「月華寺は、城の南一百里に在り。岑水銅場に附近す。梁の天竺僧の智葉創む。唐招提の朗法師 法を演ぶるの地なり。宋の紹聖の初めに重建す」とある。

羅大経『鶴林玉露』乙編卷三に、蘇軾が海南島から北帰する際にこの月華寺を通ったところ、寺の法堂がちょうど落成を迎えており、寺僧が堂屋の梁に題字するよう蘇軾に頼み、蘇軾は喜んで筆を執ったが、題字は一晩で盗まれたという記述がみえる。

1 ○天公 天のこと。天帝。2 ○結土一句 孫綽「天台山に遊ぶ賦」〔『文選』卷一一〕に、「融けては川瀆と為り、結んでは山阜と為る」とある。銅山は、銅を産する山。『漢書』鄧通伝に、「是に於て通に蜀の嚴道の銅山を賜い、自ら錢を鑄するを得しむ」とある。3 ○斷 ほる。けずる。○富媪 母なる大地の神。『漢書』札染志に引く「郊祀歌十九章」の「帝臨二」に、「后土は富媪にして、三光を昭明にす」（后土は、地の神。三光は、日・月・星）とあり、注に張晏を引いて、「媪は、老母の称なり。坤をば母と為す、故に媪と称す。海内の安定するは、富媪の功なる耳」という。4 ○金帛 黄金と絹。広く財貨をいう。○豪姦 横暴で悪辣なこと。『史記』酷吏・王温舒伝に、「素と広平に居りし時、皆な河内の豪姦の家を知る」とある。5 ○脱身・一瓦二句 一韓智翹は、「坑戸ノ銅ホリドモガ、身

二所持ノ財ヲ脱捨シテ、仏ニマイラスル心モニクイ心ゾ。仏ヲバ尊バイデ、瓦二(ツ)ホド仏ニモノヲマイラセタラバ、千金ホドモドリカエサウズ程二、錢ヲマイラスル銅ヲ、ヨウホラセテタマハレト云(フ)心デ、仏ニモノヲマイラスル程二、ニクイ意根デアルゾ」(『四河入海』卷五の三)と記す。7〇三火 月華寺が百年に三たび火災に見舞われたことをいう。原注を参照。8〇芟舎 野宿する。『周礼』夏官司馬「大司馬」に、「中夏、芟舎せしむ」とあり、鄭注に、「之を草止せしむるなり。軍に草止の法有り」(草止は野宿すること)とある。〇榛菅 叢生した草木のしげみ。「張山人を訪うて山中の字を得たり 二首」その一の注(『蘇東坡詩集』第四冊四六〇頁)を参照。9〇龍象 仏教で、すぐれた識見・力量をもつ僧侶のこと。『大智度論』卷三「初品・共摩訶比丘僧第六」(『大正藏』第二五卷)に、「諸無數阿羅漢の中に最も大いなる力あり、是を以て故に龍の如く象の如しと云う。水行の中に龍の力大いにして、陸行の中に象の力大いなればなり」とある。寺僧が、月華寺はそうした高僧を輩出してきたと説くのである。10〇反掌 手のひらを返す。容易なことをいう。『漢書』枚乘伝(「上書して呉王を諫む」)に、「為さんと欲する所を變ずるは、掌を反すよりも易く、泰山よりも安し」とある。11〇金碧氣 金色で碧い氣。杜甫「木皮嶺」詩(『杜詩詳注』卷九)に、「潤いて金碧の氣を聚め、清くして沙土の痕無し」とある。また、『史記』天官書に、「金宝の上、皆な氣有り、察せざる可からず」とある。12〇爛斑 色彩が混じり合うさま。白居易「郡中 春に謙し、因りて諸客に贈る」詩(『白居易集箋校』卷一一)に、「闇淡として緋衫故り、爛斑として白髮新たなり」とある。14〇暮施一句 鑑と鍔は、重さの単位。鑑は二十兩、鍔は六兩というが、他の説もある。一韓智翹は、「サテ人が多ク仏ニモノヲマイラセテ、財ヲ析(ル)ゾ。坑戸ノ民ガ、仏ニ銅(ヲ)析リテ、物ヲ施(ス)ゾ。サル程ニ、此(ノ)寺ヲ再造センコトハ、ヤスイ事ゾト僧ガ云(フ)ゾ」と記す。15〇自賊 自分を傷つけ損なう。『孟子』公孫丑上篇に、「是の四端有りて、而も自ら能わずと謂う者は、自ら賊う者なり」とある。16〇地脈 地のすじみち。これを断つた者には、天罰がくだるとされた。『史記』蒙恬列伝に、「恬が罪、固より死に当たれり。臨洮に起り、之を遼東に属す。城塹万余里、此れ其の中地脈を断つ無きこと能わざらんや」とある。〇天慳慳 天慳は、天が惜しみかくすこと。「凌虚台」詩(『蘇東坡詩集』第一冊五四六頁)に、「崩騰して幽賞に赴き、披豁して天慳を露わす」とある。その注を参照。17〇南畝

田畑のこと。『詩経』（ひんぷう）「七月」に、「我が婦（か）子（し）と（とも）に、彼の南畝（ななうし）に（か）鋤（か）す」とある。18〇爛漫（あふ）溢（あふ）れるほどに豊かなさま。「子由に和す 四首、韓太祝が「太山に遊ぶを送る」詩の注（『蘇東坡詩集』第三冊五三一頁）を参照。〇惲鰥 身寄りのない人。家族のいない人。柳宗元「韶州の裴曹長使君が道洲の呂八大使に寄せ、以て示さるるに酬ゆ二十韻」（『柳河東集』卷四二）に、「亡に在りて均（ひと）しく寂寞、零落 惲鰥を問う」とある。19〇道人 道を得た人。また、道を求める人。仏教の僧侶にも道教の道士にもいう。ここでは前者。20〇破鑪者飯 鑪は鼎のように足が三本あるなべ。『景德伝燈録』卷二八、汾州大達無業国師の条に、「他の古徳の道人 意を得たるの後、茅茨（ぼうし）の石室にて、折脚（せつきゃく）鑪子裏（り）に向いて飯を煮て喫して三二十年を過ぐすを看よ。名利は懐（こころ）を干（お）さず、財宝には念（おも）いを為さず、大いに人世を忘れ、跡を巖叢（いんそう）に隠す。君王命（めい）ずれども来たらず、諸侯請（こ）えども赴かず」とある。〇茅三間 部屋が三つの茅葺（かやぶ）きの家。『景德伝燈録』卷二一、杭州靈隱山高巖院咸沢（かんざい）禪師の条に、ある僧が「如何なるか是れ高巖の家風」と問うたのに対し、咸沢が、「一塢（いちう）の白雲、三間（さんけん）の茆屋（ぼうや）」（茆は茅に通じる）と答えた話が見える。〇（原注） 岑水場は、韶州にあった鉍石の採掘場で、この詩に述べられるように主に銅や銀を産した。『輿地紀勝』卷九〇「古跡・岑水場」に、「岑水場、銀・銅を出産す。慶曆七年（一〇四七）、置く」とある（宋・張端義『貴耳集』卷下「韶州洿水場……」には、産出量などについてのやや詳しい記述がみえる）。施は、ほどこしをする。寺や僧侶に金品を与える。坑戸は採掘者。宋・趙彦衛『雲麓漫鈔』卷二に、「三兩日を俟（まち）ちて再び煎（い）りて碎銀（さいぎん）と成し、五十三兩毎（ごと）に一包（ひと）と為（な）し、坑戸と三七もて之を分かつ。官は三分を収め、坑戸は七分を得」とある。焚は、焼ける。火災に遭う。

天はなぜ我が身をいとおしむことなく、土を固め石を融かして銅山をつくりあげたのだろうか。無数の人々が我れ先に採掘すれば、母なる大地の神は泣き、横暴な悪党どもの懐に財宝が入るばかりだ。身銭を切つて喜捨する彼らにはきつと下心があつて、かわら一枚ほどの施しで千金の御利益あれと思えばこそなのだ。

そうすると月華寺が三たび火に見舞われたは天の意志か。今は僧たちが草木の茂みに仮住まいをしている。彼らはそれでも言う、「この地はそもそも高僧の多く出るところで、お寺を再興するのは手のひらを反（かえ）すよう

にたやすいことです。夜に岩山から金碧の銅の気が立ちのぼれば、翌朝には青色が入りまじった珍しい鉱石が現れましょう。そうなれば地に穿った銅坑から銭が湧いて流れ出るようなもの。暮れには百鎰ひゃくい、あくる朝には千鎰せんいのお布施がありましよう」と。

この山が宝を産出するのは自分の身を損なうに等しいこと。地脈がすでに断たれたのは天がそれを慳おしんだからに他ならない。それよりも銅山を田畑に換えて、キビや麦をたつぷり実らせて身寄りなき者を救えないものか。

道人たちよ、修行をするに何が必要なのか。三部屋の茅葺かやぶきに住まい、脚折れの鼎かまで飯を炊くこそよろしかろうに。

（担当 西岡 淳）

〔附記〕二〇二三年四月二十一日、南山読蘇会を率いてこられた山本和義先生が館を捐てられた。南山読蘇会は、二〇〇一年五月二十六日から、南山大学の会議室を借りて開催していたが、今から六年ほど前からは、先生のご健康を配慮して、ご自宅近くの公民館を借りて開くようになった（現在は大学で開催）。開始以来二十余年、先生を含む構成メンバーにはさまざまな出来事があった。この間に先生から賜った学恩はもとより計り知れず、我々の悲しみはいつまでも尽きることがないが、先生の教えは我々のなかに生き続ける。それをこの『蘇軾詩注解』によって今後もかたちにしていく所存である。なお、『注解（一）』冒頭の山本先生の「序言」にあるように、我々は京都読蘇会の後を継いで、『施注蘇詩』卷二七の「王晉卿作煙江疊嶂図云々」から会説を始めた。そして二〇一七年一二月、蘇軾の海外流謫から北帰に至る最晩年の作を先生とともに読了した後は、『橄欖』所収の小川環樹『蘇東坡詩集補』（山本和義補訂）を承けて、「夜過舒堯文戲作」詩（『施注蘇詩』卷一五）から会説を再開した。現在は、蘇軾の黃州流謫時の諸作を読み進めているところである（西岡記）。